



# 看護師さんの昼寝

〈福島県〉いがらし五十嵐 かずお一男 74歳

「ばっちゃん、来たよ」

Kさんは祖母を巡回看護して下さる役場の保健師だった。祖母は、脳梗塞により半身不随となり一人で起きることなどができなかつた。まだ入居できる施設が少なかつたころのこと、祖母は自宅で療養していた。祖母が発病した時、Kさんは近くの病院に看護師として勤務しており、祖母を初めて医師と一緒に往診された方で、役場の職員になってからも引き続き担当してくれていた。

そのころ、わが家は生活に追われ、祖母が療養している部屋の環境は決して良好ではなかつた。Kさんは、冒頭のあいさつもそこそこに祖母の周りを手早く片付け、祖母の体を拭き、爪を切りながら笑顔で言う。

「ばっちゃん、きょうはいい顔してる。」

何かいいことあったの？」

「あつたとも。分かつか？」

「分かるよ。ちゃん顔に書いてあるも」

祖母は、嫁いだ娘が持ってきてくれた菓子をゴソゴソと出す。Kさんはそれをうれしそうに食べながら「ばっちゃん、ここが一番いい。私、眠くなっちゃった。寝てもいい？」

Kさんは、来るたびにほんの一時、祖母のひざを枕にして昼寝をされた。祖母は、唯一自由になる右手にうちわを握り、Kさんの顔を優しくあおぎながら「くたびれてんだべ。あつちこつち回って来てな。これ」と言う。

日ごろ、一人で過ごすことの多い祖母に、まるで里帰りした娘のように心を通わせてくれたKさんは、看護を超えた精神的な支えでもあつた。Kさんは、

多くの巡回先の中から、なぜか雑然とした祖母の部屋に来て昼寝をしてくれた。その姿を見つめながら、祖母はその時、病気を忘れて一人の母親にかえり最高の安らぎを感じていたのだろう。

祖母は、若葉の香りの中、ほほ笑みながら家族とKさんの名を呼び「ありがとう」と言って昇天した。祖母にとってKさんは看護を通し、家族愛に劣らない生きる喜びを与えてくれた世界一の保健師さんだった。